
本当に科学的に正しいヒーロー・・・・・・・・だともいいんだけど

k.i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当に科学的に正しいヒーロー……だと良いんだけど

【Nコード】

N5505Z

【作者名】

k.i

【あらすじ】

とある財団に捕まった広光介は、電磁と馬力の組み合わせの上
下半分こ怪人、ガウバにされてしまった！ 同い年のクセして喫茶
店の店長をし、ジジイ臭い草柳恭と、同い年のクセしてまだウエイ
トレスどまりの小荒優とともに、少しでも正義を貫いて、面白いコ
トをやらかす！

かなり短い、ある意味k.iの練習となる短期連載第一作です。

1 実験+プロローグ(前書き)

短いです。

1 実験+プロローグ

ガウス。

電磁単位の一つで、まあ電磁という意味でいいんじゃないかな。馬力。

力の単位。まあ、ひらつたく言えば、力という意味？

あんまし勉強してないから、わかんないや。

「コードG+B、行っぞ」

「はい。えーと、この人間は、一週間前にさらってきた、身分証明書によるとひろがらすけ広光介」

ガウスGと、B（馬力）。こんなところだろう。

僕は、暗闇の中にいた。目を瞑ってるからだ。

「なーんか、僕の名前が何度も聞こえる。さっきからだ。」がうば
”に変えるとか何とかって。

「改造人間電磁馬力タイプ、変換準備整いました」

「そうか。我々の計画のため、このタイプは欲しかったところだ。

よし、やれ」

改造人間？

テレビの中だけの存在だよな。

どうして、僕がそれにされるの？ といつか、どうして、そんなものがあるの？

わからないものへの恐怖。

人に備わってる恐怖。

それが、僕を目覚めさせた。

「ちよっと、何しようとしてるんだ!？」

まず、叫んだ。当然。僕を改造しようって、よくわからない。真

意を聞きたいところだ。

「チツ、覚醒したか。おい、麻酔薬全然足りていないぞ。これじゃあ、ショック死してしまうじゃないか」

「はっ。すみません。クロロホルムレベルを上げておきます」

「うむ。短期的だから、完全には眠らせないようにと思ったが、こうなれば、一晩ほど眠ってもらったほうが安全だ」

ツツツツツ……。

刹那感じる、体内の違和感。それは、猛烈に感じられ、また、同時に小さく感じられた。本当に、些細なコトみたいに、
でも。

このままだと、もしかして僕、死ぬんじゃないの？ いや、死なないにしても、改造やらなんかで解剖みたいなことされて結局死刑みたいなもんじゃないか。

嫌だ。

率直な感想。覚醒してる今なら、言える。正気じゃこんなこと、ありえない。

「まだ目え開けてるぞ」

「そろそろ視界がなくなってきたハズです。ご安心ください」

「こんなこと、あり、え、な、い……………」

1 実験+プロローグ(後書き)

もう一度言います。本当に短いです。

そう簡単に連載に踏み切るのはどうかと思うので、別のヒーロー作品を作っている際に、ある意味練習として作らせていただきました。

ただし、あまり良いものとはいえないかもしれません。

かなり短い付き合いとなりますが、感想等あればよろしくお願いします。

2 逃走と電磁力(前書き)

実験第二話です。いずれ、別の話で。

2 逃走と電磁力

「逃げたぞ、追え！」

「そー簡単に捕まるかよっ！」

外は夜だった。僕は、ギリギリのところまで逃げ出した。

身体各部には、何かいようなワッペンが付けられていたから、取り去った。

何日寝たか知らないけど、起きたらすぐに逃げた。動きが遅い僕にしては上出来だ。多分、改造前に一度目を覚ましていたのが良かったのかもしれない。

タタタタタタ……。

「くそっ、馬力人間は足が速くて追いつけん。誰か、車を用意しろ」
「わかりました」

白服どもが、車両を見つけに行ったのか、走り出した。

さっきのあいつのセリフでわかってしまった。

僕は、もう改造、されている。

これがマジなら、恐ろしい事実だ。ついこの前まで、平穩無事な日常を送っていた奴が、突如誘拐されて、そいで解剖まがいのコトされて改造人間にされて。

全てが非常識。

そんなバカな、なんて言っただって始まらない。今はただこの逃走劇を成功させるだけ。

エンジン音が、やまびこのように鳴り響く。この夜道、人は多くない。ある程度音を出しても大丈夫だからだろう。こんな時間に逃げ出すなんて、僕はつくづく運がない。いや、逃げられただけ運が

良かったと神様に感謝すべき？

「あいつは電磁馬力人間。撃つても障害は残らない。とにかく気絶させる！」

その後、薬莢が飛ぶ音と共に、金属の弾丸が僕の頬をかすめた。ちくしよう、銃まで持ち出してくるとなると、危険だ。

速く足を動かしたいのなら、強く腕を振るのが良いつて、よく聞いた。それに、地面を思いつきり蹴るということ。

それらの情報が、こんな形で僕の脳裏に現れることになるとは。どうでもいいや、まずは逃げなきゃ。

タキユン！

またも、銃弾が僕にかする。今度は手首。こんなに当たりが悪いのは、僕が常人よりも足が速くなったからだろうか。

ケガしてないか心配して、僕は右手首を見た。痛みはあまり感じられないけど、あの麻酔がまだ効果を發揮している、ということも否めないからだ。

「……………」

何と、僕の腕には、何かが巻かれている。金属質の、銀色。何だろう。何の装置だというのだろう。しかも、同じものが、左手首にも付けられていた。

「イカン、ガウバが電磁力解放機に気付いた。ここまで来ると、もうマズイ！」

後ろから走ってきているであろう車から、中年と思われる男の声

が。
電磁力解放機……………？

そういえば、足が速いつてのは、『馬力人間』だから。ってコトは、コレは、電磁の力を出すための！

「やめる、ガウバ！ それを使うのは非科学的かつ危険。馬力だけならば筋力増強で済んだが、その電磁力解放は、一度きりの技。このような場で使われては、我々に大きな損害をこうむる！」

その、我々にとって、という言葉に、ムカつときた。

「うるさい、僕の身体なのに、『我々の損害』とか言うな！」

ええい、このスイッチを押すんだな！？

一度きりと言ったって、二度目までいける可能性は否定出来ないはずだ。だったら、やる価値は十二分にある。

カチッ

軽い音と共に、片方の手、右手首のスイッチを押した。

後ろの奴らの叫び声と、わんわんとした脳に響く不快な調子の音が、同時に聞こえた。

2 逃走と電磁力（後書き）

短期連載ラウバ、次回もお楽しみに！

3 喫茶店とジジイマスター

喫茶店『HAPPY』。

何かダサイ名前だ。でも、そのニュアンスは良く伝わる。

二十歳を既に越えている、僕と同じ年の奴がマスターをやったたりする。

ともかく、ココには、結構お世話になってる。いわゆる常連客だから、少しばかりお邪魔させてもらおう。

今の僕の身体の状態は、ひどいものだった。

右腕の感覚はほとんどないし、服は擦り切れまくり。普通に外を歩いていたら、奇怪な目で見られるか、救急車を呼ぶか、どっちかだ。

でも、改造された身体をひけらかしたくない僕は、出来るだけ人の目の届かない道を歩いた。

『HAPPY』の裏口が見えてきた。

店長の草柳恭くさやなぎたかひさが、タバコを手に持っている。

「よっ、マスター」

僕は、大丈夫なほうの左腕をすつと上げた。

「………？ ああ、広光介か」

「ああ。ちょっとばかり治療してくんない？ 喫茶店だけど、ちょっとはあるでしょ？ 医療道具」

「うおおっ、お前、その傷は、生きてることが科学的にありえん！

一体どうしたんじゃ！？」

同い年のクセして、精神年齢だけは異常な程ジジイなマスター！。

こうして見てみると、前から済んでた街に帰ってこられたことが実感できて、ほっとした。それに、コイツなら、科学に詳しいから、あんまし隠さずに話せるんだ。

「……なるほど、筋力増強改造に、電磁耐性強化じゃな」
「マスター、漢字使いまくれば頭良いつてワケじゃないからね」
「嫌、これは科学的に由々しき事態。指をくわえてじっと見てる訳にはいかん。よし、まずは筋力の程を試してみよう。ちよっとこの握力計を握ってみるのじゃ」
「こつ?」

バキッ

嫌な音を立てて、握力計は握りつぶされた。僕の拳の中で。
「推定、わからず、と……」
「それ、推定じゃないよね!？」

『握力……とんでもなく凄い』

マスターの手に持たれている白紙には、このように、黒く記入された。
れた。

「が、馬力人間、と奴らは言ったのじゃな」
「うん」

「さらに、下半身が、とも。となれば、この握力、足のほうではさらに凄いコトになると……」

「計るの?」
「嫌じゃな。医療用具使って、さらに各種計測計まで壊されたらたまらんからの」

確かに一理ある。

「どつちにしろ、今日はここで休養してゆけい。警察沙汰になるのはまずいんじゃない」

「ああ」

警察に見つかれば、僕を捕まえた組織まで連絡が行き、僕の居場

所が明確になってしまふ。

「ワシも命が惜しいから、警察に連絡したいの」

「待って、お願い」

「………冗談」

「冗談なら何故受話器を既に持ってるのかお聞かせ願いたいところだ。」

4 公言とマスター

そんなこんなで時間が過ぎて。

いつも通り、目立たないようにして『HAPPY』で夕食を食べることにした。

知り合いが喫茶店にいるなんて、僕は本当にラッキーだ。変な組織に捕まりさえしなければもっと良かったのに。きつと、神様は人に等しく幸と不幸を与えてくださるだろう。

ただ、同じ年齢なのに、僕はそこら辺にいるつまらない男、アイツはジジイ臭いけど一つの店の店長。少しばかり納得がいかない。

世の中には、もっと低い底辺にいる奴だっているというのに。例えば、ホラ、そのウェイトレスとか。

おぼんを持って、厨房の中に入っていく。僕がさつき注文したからだ。きつとその内容をコック（と言っても店員はハッキリ言っマスターとウェイトレスだけだから正確にはマスター）に教えに行つたのだろう。

毎回来ているからわかるんだけど、実はあの人、僕やマスターと同年齢だ。それなのに、マスターとウェイトレスという非常にバランスの悪い関係。まあ、僕が一般人で、あの人がそれより低く、マスターがそれより高い、つてところかな。

たった一人で厨房を独占するマスターは、本当に料理の腕が良い。いつから練習してるんだろう、つてくらい。そうでもなくちゃ、こんな店員の少ない状況ではやっていけない。まさに神の速さでやらないとダメだ。

いいや、別にウェイトレスという働きが、低い水準なワケじゃない。ただ、同年齢なのに、こんなに違いがあつていいのかな、つていう。

頬杖をついて思考していると、突然お呼びがかかった。あのウエ

イトレスからだ。

「十分少々お待ち下さい」

ホラ見る。十分で、カレーライス二杯作る、という宣言をマスターはかましたんだ。それだけ腕に自信があるってコト。

でも、他に客がいなくてがらつがらに開いてるところに、僕しかない。だったら、少しくらい遅くしたっていいもんだけど。まあ客の言うセリフじゃないな。きつとマスターにも、最短で最高に作る、というこだわりがあるんだ。

ふっと思案から現実に戻り、頼杖を解除すると、質素な木製のテーブルとイスが目に入った。マスター、本当にこういうの好きだな。ウエイトレス服も、あんまりたいそうなものじゃなく、例えるなら、真っ赤なエプロン……？ 種類は良く知らないけど。

「光介さん、深夜に来るとは、珍しいですね」

ウエイトレスから声がかかる。さすがに、食事時は大抵来てるから、顔を覚えられているらしい。

あの人の言う通り、僕にとっての食事時は、というか大多数の人にとっての食事時も、朝・昼・晩。こういった店に、深夜まで客が出入りするのはいらないことだ。『HAPPY』も、今は少しばかり時間延長でやってもらってる。

とりあえず、傷もあんまり見えないし、服もマスターから借りたものに着替えたから、バレることはないだろうけれども、わからないように細心の注意を……。

「やっぱり、誘拐されて逃げてきただけに、時間は選んでいられますんか」

「……知ってるのかい？」

「はい。ジジ……いえ、マスターから教えていただきました」

一瞬『ジジイ』というイヤミ的言葉が彼女の口から飛び出しそう

になったけど、それはこの際おいておこう。なんせ、マスターはマジでジジイだから。

それにしても、あのジジイ男、公言するなよと言いつつ、一人だけのウエイトレスにはしっかりバラしてるじゃないか……。そこから広がることはないと信じている。でも、あまりにも危険過ぎるじゃないか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5505z/>

本当に科学的に正しいヒーロー・・・・・・・・・・だと良いんだけど

2011年12月20日00時54分発行